

被災地責任と災害伝承

兵庫県立大学教授

室崎 益輝

大規模な災害の被災地は、世界中の人々から多大な支援を受ける。阪神・淡路大震災や東日本大震災においては、その支援に後押しされて復興を遂げることができた。それだけに、この多くの皆さんの支援に報いることが、被災地には道義的な責任として課せられる。

この被災地責任は、次の3つの形で果たすことができる。第1は、次の被災地に対して支援のバトタッチをすることである。第2は、期待に応え復興を成し遂げ未来社会のモデルを示すことである。第3は、災害経験の伝承をはかり減災への指針を示すことである。

このうちの、支援の数珠つなぎと未来社会の創造については、別の機会に論じることとし、今回は災害経験伝承のあり方について論じることにした。体験や教訓を正しく伝えることができず、同じ過ちを繰り返している現実が存在しているからである。

被災者への慰霊と災害伝承

災害伝承は、被災地の責任であるといった。その責任は、次の災害での被害軽減の責任と、亡くなられた方々への鎮魂慰霊の責任の2つに分けられる。何のために伝承をはかるのかというと、その2つの責任を果たすためである。ここで、留意しなければならないのは、次の災害に目を向けるだけでなく、犠牲になった人々に向き合うことを忘れてならない、ということである。

被災者への慰霊は、墓碑に名を刻むことだけではない。慰霊では、その墓碑に手を合わせ、被災

者の生きていた姿を追憶することが欠かせない。さらには、尊い命がなぜ失われたのかを反芻することも欠かせない。なぜ命が失われたかを問うのは、責任を追及するためではなく再発防止を誓うためである。追憶と誓約とが慰霊の基本的な要素である。

それゆえ、ひとり一人の犠牲者の記録を大切にし、生前の姿も含めて記憶を残し伝えることが、求められる。犠牲者の個別性を大切にしなければならないのだ。大震災の後、「阪神大震災を記録し続ける会」や「震災犠牲者聞き語り調査会」がひとり一人を大切にしたい記録を残してきたのは、伝承の原点に慰霊があるからだ。伝承のために、記録をつくるにも遺構を残すにも、犠牲者や遺族の気持ちに寄り添うこと、ひとり一人を大切にすることが持たなければならない。

再発防止と災害伝承

2度と同じ苦しみや悲しみを味合わせはならないし、2度と同じ過ちを繰り返してもならない。再発防止のために語り継ぐことが求められる。そのためには、被災の事実だけでなく被災の原因をも伝えなければならない。なぜ、被害や犠牲がもたらされたのかを自省的に振り返り、自然的要因はともかく社会的要因や技術的要因を明らかにしなければならない。それゆえにこそ、被災の背景にある人間としての弱さや社会としての過ちを伝えることを、忘れてならない。

ところで、その原因や背景の提示だけでは不十分である。それを克服する道筋を示さなければなら

らない。災害の後、その原因解消に被災地がいかに挑んだかも伝えなければならない。教訓の伝承では、再発防止の可能性を示すことが求められるからだ。どうすれば原因を取り除けるかを、教訓あるいは指針として提起しなければならない。「生かして伝える、学んで生かす」という伝承のサイクルは、教訓を生かす姿を伝えることを、求めている。

阪神・淡路大震災では、互いに助け合うことと事前に準備することの大切さを学んだ。その学びから被災地では、義援金の前払いとしての住宅再建共済や減災文化につながる意識啓発教育などが提起されたが、それが思うように進んでいない。となると、範を示すことができなくなり、教訓の発信力は小さくなる。ともに減災を目指すという姿勢があってこそ、伝承の協働作業が成り立つ。

なお、再発防止の可能性を示すことも大切だが、必要性を示すことはもっと大切である。この必要性を示すには、災害の苦しみや悲しみを伝えなければならない。広島原爆資料館は、戦争や原爆の残虐性をしっかり伝えて、平和への努力の必要性を教えている。悲慘さを伝えてこそ、その悲慘さを回避しようとする思い、災害に立ち向かおうとする思いが生まれる。

さて、誤りを伝えることについては、責任追及を恐れて為政者が消極的になる。悲しみを伝えることについては、フラッシュバックを恐れて被災者が消極的になる。それゆえに、被災時の助け合いや復興時の努力などの美談を中心に教訓を伝えがちになる。成功体験は伝えても失敗体験は伝えない傾向にある。阪神・淡路大震災後につくられた伝承施設の「人と防災未来センター」の展示においても、誤りと悲しみは伝えきれていない。それだけに、光とともに蔭を伝える心と技を磨かねばと思っている。

語り部と災害伝承

災害の伝承では、何をどのように伝えるかが問われる。「何を」という伝承の内容については先に触れた。ここでは「どのように」という手段に

ついて触れておきたい。伝承の手段として、人、もの、スペースが欠かせない。スペースというのは、祈念公園や伝承館などの伝えるための施設や場所をいう。そこでは、人々に鎮魂や学習の気持ちを抱かせる空間的な演出が求められる。涙を流す場も欲しいし、静かに考えるスペースも欲しい。

ところで、災害の破壊力や被災の残酷さを伝えるうえで、破壊されたリアルな姿に触れることが欠かせない。破壊を受けた地物や建物の姿をそのまま残して、そのメッセージを伝えることが求められる。広島原爆ドーム、淡路島の断層保存館、気仙沼の津波伝承館などは、破壊力の凄まじさをリアルに伝えてくれる。

しかし、そうした遺構だけでは、災害の悲しみの全体像はつかめない。形では見えない傷跡が無数に存在し、その傷跡からしかわからない悲慘さを伝えなければならない。そのために、ひとり一人の悲しみを含めて、心の中の傷を聞き語りによって可視化しなければならない。手記や体験談はその心の中を伝えるうえで欠かせない。演劇や文学にして伝えることもできる。

この形に現れない傷を伝えるうえでは、それを伝える人が果たす役割が大きい。私は、遺構などの「もの」以上に語り継ぐ「人」が大切だと思っている。「語り部」と称される伝承者が欠かせない。語り部は、事実には追悼の思いや自省の思いを乗せて、語り継ぐ。事実をそのまま語るだけでなく、事実の持つ意味を上乗せして伝えるのである。その伝えるべき意味は、時代とともに変化してゆく。10年前の意味付けと20年後の意味付けは違ってくる。この意味づけをいかにはかるか、伝承者のあり方が問われる。

昨年末に、神戸で「震災語り部フォーラム」が開催された。そこで、若い未経験者でも経験を正しく伝えることができると、確信した。何を伝えるべきか、いかに伝えるべきかを文化として、世代を超えて伝えてゆく。それは「被災地責任」ではなく「被災者責任」で、当事者である第1世代は、第2世代に受け渡す責務があると思っている。後継者を育むことこそ、伝承の神髄かもしれない。